

Asian Diversity No.11 by ASNET

「日本・アジア学」講義紹介 『アジアでがんを生き延びる』

感染症の克服や目覚ましい経済発展により、高齢化社会にあるアジアは、がんの急増に直面している。がんという病は、遺伝的素因や生活習慣などの違いによる地域性の強いものであり、多様な文化的背景をもつアジアのがんの姿を捉えることは難しい。

本講座を受け持つ赤座英之研究室は、アジアのがんの特性を欧米と比較検討することで、アジアを中心とした新規薬剤開発や安全かつ有効な治療法の開発を研究している。

本講座では、疾病に関する科学的知識よりも、この重い共有課題をどうアジアとともに乗り越えるべきなのか、アジアのがんに纏わる様々な問いを投げかけ、毎回外部講師を招き、語りを重ねている。各分野の第一人者の方たちの確かな眼差しは、学知の世界にはない具体性を持ち、そこに通底する普遍性を分野を越えて考えることは、新しい知の構築にも繋がっていく。

毎回、様々な切り口で、アジアのがんという事柄が、語られていくことを、小さな教室の中で、その息遣いまでもじっと耳をすませ聞いていく学生は、問われるべきことは何なのか、それぞれの専門領域にひきよせて、問いを立てて、講師と対話をする。がんは、長い歳月を経たひとのくらしの営みの中にある。科学的データだけでは読み解けぬ、この重い共有課題を考えていく道筋を探り当てることは、アジアと日本はどう向き合って生き延びていくのかという問いにも開かれていく。

生命科学がさまざまな知の統合を目指している今、領域を越えた視点の広がりこそが、アジアのダイナミズムのなかで、われわれが生き延びる智慧を紡いでいくはずである。



学生の質問に答える、野木森雅郁アステラス製薬(株)代表取締役会長(7月22日授業風景)
文・写真:河原ノリエ

『アジアでがんを生き延びる』講義は冬学期も開講します。
詳しくは、
<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/edu/>

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク(ASNET機構)は、アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。詳しくは下記のURL:

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

Relay Column

ワタシのオシゴト / 第67回

Rings around the UT

本部環境安全課 安全企画チーム

塚田 博明さん

3.11東日本大震災発生！その後



3.11すっぱい思い出

主に事故災害や防災を担当しています。よって3.11は本番中の本番でした。災害対策本部の設置場所の山上会館へ走り、開催中の会議を中止にさせていただいての設置準備、次は備蓄倉庫の開錠でしたが、鍵を本部棟11Fに忘れて取りに戻りました。そして倉庫を開けようとしたら鍵が間違っていました(ガーン)。再度取りに階段を上り、その後病院や消防署・駅を回り、両ふくらはぎが吊っている状態での「リアカーで物資を運ぶから応援頼む」との指示あり(ガーン)。今後はとにかく落ち着いて行動したいと思います。

その後は24時間体制での放射線測定のための泊り込み、一般の方などから放射線関係の相談電話対応の日々が続き(現在も継続中)、対応のため勉強の日々です。

東京大学に採用されて以来、フットサルが趣味になり、月に一度やっています。



環境安全本部関係者での歓送迎会にて

得意ワザ：低速トリプルシザース(フットサル)

自分の性格：俗物

次回執筆者のご指名：新井喜洋さん

次回執筆者との関係：2007年新潟中越沖地震で東大病院日本DMAT隊として実際に医療活動した仲間

次回執筆者の紹介：災害医療に情熱を燃やす
熱血ナースマン!